

じょうかん どうわ
情感豊かな童話作家 新美南吉(1913~1943)

りやく れき
【略 歴】

1913年(大正2年) 愛知県知多郡半田町に渡辺家の次男として生まれる。4歳の時に母をなくし、8歳の時祖母の養子となり、新美の名前をつぐ。県立半田中学校2年生のころから文学に興味を持ち、同人誌(同じ考えや好みを持つ人が集まって出す雑誌)を出したり、雑誌に投稿したりする。

1931年(昭和6年)に半田尋常小学校の代用教員になる。

1932年、19歳の時、東京外国語学校英語部文科に入学し、この年、代表作の『ごんぎつね』が雑誌「赤い鳥」に掲載される。20歳の時かつ血(咳と同時に血を吐くこと)、しばらく静養する。1938年(昭和13年)、愛知県立安城高等女学校に勤め生活が安定してくる。

1941年ごろから病状が悪化し始めるが、多くの作品を創作し、ようやく児童文学者と認められるようになる。

1943年(昭和18年)年末から学校を長期欠勤していたが、病状が進み、2月に女学校を退職。2月14日に父親に遺言状を書く。3月22日、喉頭結核のため29歳の若さで亡くなる。

【おもな作品】

- 『ごんぎつね』(1932)
- 『手袋を買いに』(1933)
- 『でんでんむしのかなしみ』(1935)
- 『ごんごろ鐘』、『貧乏な少年の話』(1942.3月)
- 『おじいさんのランプ』(1942.4月)
- 『牛をつないだ樁の木』、『百姓の足、坊さんの足』
- 『花のき村と盗人たち』(1942.5月)



中学生のころ



外国語学校のころ



女学校勤務のころ

新美南吉は、代用教員をしていた18歳の時に、自分の作った童話を子ども達に聞かせたりしていたそうです。そうした子ども達との交流から『ごんぎつね』が生まれたのでしょう。

南吉は、「大人達が気づかないことを、君達の方が先にわかってしまうかもしれない。何しろ、君達子どもの目は、ちっともにごっていない、よく澄んでいるから。」と子ども達に語りかけています。

南吉は若いころから病におしばまれていたのですが、病の中でも、人間へのあたたかいまなざしを持って、童話を書き続けました。1942年に南吉の生前の唯一の童話集『おじいさんのランプ』が出版されましたが、出版記念会には、病のため出席できませんでした。

南吉の童話を読むと、心にしみじみとしたものを感じます。「ごんぎつね」では、心が通じ合わない悲しさが描かれていましたが、他の作品の中には、心と心が通じ合い、人間の豊かな感情が描かれています。

さあ、新美南吉の他の作品も読んでみましょう。

参考文献 『「国語」に出てくる人物』(あすなろ書房)、写真:新美南吉記念館HPより